

「ジャポニスム2018」続報 10

本号では、パリで開催された「ジャポニスム2018」の主な参加企画展等について報告致します。

1

目次

【参加企画展】

1. 「日本の近代版画 1900～1960 生まれ変わる波」展 2
カストディア財団美術館で開催中の日本の近代版画を集めたオランダにあるコレクションの展覧会。
2. 「日本の竹芸術 空を割く」展 3
ケ・ブランリー ジャック・シラク美術館で開催中の明治期、第二次大戦後、そして現存作家の作品を集めた欧州初の竹芸術展。
3. 「黒田アキ アクアシティ」展 4～5
パリ水族館で開催されたパリ在住の日本を代表する芸術家・黒田アキさんの展覧会。

【当館後援展】

4. 「大小島真木 “L’oeil de la Baleine 鯨の目”」展 6～8
パリ水族館で開催中の日本の若いアーティスト大小島真木さんのパリ初個展。

① 「日本の近代版画 1900～1960 生まれ変わる波」展

10月6日(土)から2019年1月6日(日)まで、パリ7区リール通り121番地にあるオランダ系美術財団が運営するカストディア財団美術館で「ジャポニスム2018」の参加企画として「日本の近代版画 1900～1960 生まれ変わる波」展が開かれています。

日本の伝統的な木版画(浮世絵)は幕末から明治にかけての開国以来、西洋からもたらされた新しい版画技術の導入とともに、大きな変貌を遂げました。版画の題材もそれまでの芸者や歌舞伎の世界、武士の偉業といったテーマが廃れ始め、また版画制作過程におけるアーティストの役割も変わり始めました。20世紀初頭になるとそうした新しい波に対する2通りの流れが生まれます。一つは浮世絵商で版元であった渡邊庄三郎が探究したもので、伝統的な浮世絵の製法を踏襲して、アーティストと彫り師、刷り師、版元が役割分担する「新版画」の流れです。もう一つは西洋の習慣にならって、描く、彫る、刷るといった版画の工程のすべてをアーティスト自らが行う「創作版画」の流れです。

本展はオランダにある日本近代版画のコレクションを紹介するフランスで初めての展覧会です。25年前にエリーズ・ヴェッセルという人によって蒐集され始めた同コレクションは、現在アムステルダムの「日本の版画」美術館に収蔵されていますが、数年後にはアムステルダム国立美術館(Rijksmuseum Amsterdam)に寄贈されることになっているそうです。

山本鼎、石井柏亭、橋口五葉、恩地孝四郎、伊東深水、坂本繁二郎、川瀬巴水、安井曾太郎、竹久夢二、梅原龍三郎、織田一磨、石川寅治といった作家たちの作品が200点強展示されています。江戸期の浮世絵とは違う近代版画の多様な構図とテーマと色彩を味わうことができる展覧会です。



美術館の外に貼られた展覧会のポスター

② 「日本の竹芸術 空を割く」展

11月27日（火）から2019年4月7日（日）までケ・ブランリー ジャック・シラク美術館で「ジャポニスム2018」の参加企画「日本の竹芸術 空を割く」展が開催されています。同展は館長のステファヌ・マルタンさんの監修のもと、明治期の作品、第二次大戦後の作品、そして現存作家の作品の三部で構成されています。

日本の竹細工は米国の美術館にはある程度常設展示されているものの、日本や欧州の公的美術館には限定された数しかありません。例えば東京の近代美術館には50点ほどのコレクションしかないということです。その意味で、今回の展覧会は欧州で初めての大規模竹細工展となります。今回の展覧会により、日本の竹細工の再発見、再評価がなされることを主催者および竹細工アーティストたちは期待しています。

3



展覧会風景

展覧会初日の11月27日（火）に、同美術館の最上階にあるレ・ゾンプル（影）というエッフェル塔を仰ぐレストランで、アーティストたちとその家族や美術館に縁の深い人たちを招いた夕食会がありました。そこには竹匠の長倉健一さんのご令室（作家本人は展覧会を見ることなく直前に他界されました）、米澤二郎さん、杉浦功悦さん、田辺竹雲斎さん、森上仁さんら、現役の竹匠たちが参加、お互いに親交を深めていました。

③ 「黒田アキ アクアシティ」展

パリ水族館の前身は 1878 年のパリ万博の時に作られたトロカデロ水族館で、20 世紀後半から閉鎖されていましたが、2006 年に改装され再開しました。そのパリ水族館が 5 年前から現代アーティストを招いて展覧会を開催しています。

今年は「ジャポニスム 2018」期間中ということで、1970 年以來パリに住んで制作活動をしている日本の代表的芸術家である黒田アキさんが招かれました。黒田さんに「白紙委任状」を出して好きなように展覧会を構成してもらうというコンセプトで、タイトルは「アクアシティ」。9 月 13 日（木）から 11 月 11 日（日）まで開催されました。

黒田さんとパリ日本文化会館との関係は開館当初に遡ります。1997 年、会館がオープンする前のこと、地上階の正面の白い壁に飾る絵が必要だということで、黒田アキさんにその壁に相応しい絵を描いてもらうことになりました。注文後数カ月して当時バック通りにあった黒田さんのアトリエに見に行くと、美しいブルーと黒の大キャンバスが目飛び込んできました。開館当初ということでこれからどのように会館事業が展開していくかわからない未知の状態を、宇宙の開闢のイメージに重ねたものでした。絵のタイトルは「Big Magma X」です。その頃、黒田さんの作品といえば「カリアティード（女像柱）」のシルエットをデザイン化したような研ぎ澄まされた形体とコントラストの強い配色で有名でしたが、パリ日本文化会館所蔵の絵は、束縛のないより自由な筆致で描かれています。現在、同作品は日本式 2 階の館長室へ通じる廊下の壁に掛けられていて、筆者は毎日のように目にし、パリ日本文化会館の活動の変遷に思いを馳せています。



黒田アキさんの「Big Magma X」（1997 年、キャンバスにアクリル、2m×6m）（左）と「カリアティード」（パリ日本文化会館所蔵）

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

今回の展覧会に出品された作品は、ユーモアと詩情を交え、自由な囚われのない線と形を主体にしていて、水と、そこに生息する魚やクラゲたちのように浮遊し流動する世界によく調和していました。この展覧会を通じて、黒田さんは海の美しさと脆弱さを訴えたかったのでしょうか。私たち観客は、水族館にいる生物たちとともに、絵画、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスなどを組み合わせた黒田さんが近年取り組んでいるトータル・アートスペクタクル「COSMOGARDEN」（宇宙庭園＝コスモガーデン）の洒落な世界を楽しませてもらいました。



黒田アキさんの作品（パリ水族館のホームページより）

<http://www.cineacqua.com/index.php/fr/carte-blanche-a-aki-kuroda>

本展は以下のサイトでも報道されました。

- <https://www.sortiraparis.com/arts-culture/exposition/articles/174642-carte-blanche-a-aki-kuroda-a-l-aquarium-de-paris>
- <https://sortir.telerama.fr/evenements/expos/aki-kuroda-aquacity,n5747610.php>
- <https://www.lejapon.paris/exposition/aki-kuroda-aquacity/>
- <https://www.connaissancedesarts.com/evenement/aki-kuroda-aquacity/>
- <https://www.arts-in-the-city.com/2018/08/07/aquacity/>
- <https://dibutade.fr/event/exposition-aki-kuroda/>
- <https://www.lejournaldesarts.fr/creation/aki-kuroda-aquarium-de-paris-139823>

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

④ 「大小島真木 “L’oeil de la Baleine 鯨の目”」展

「黒田アキ アクアシティ」展に続き、パリ水族館では12月5日(水)から2019年1月20日(日)までパリ日本文化会館が後援している「大小島真木 “L’oeil de la Baleine 鯨の目”」展が開催されています。ベテランの画家・黒田アキさんとは世代も作風も異なる大小島さんを取り上げることで、日本の美術界の幅の広さと創造活動の連続性を紹介する意図が込められています。

12月5日に内覧会がありました。ポウレヴィッツ館長、筆者に続き、本展に協賛しているアニエスベーさんが挨拶に立ちました。パリ水族館の館長は非常に日本贔屓で、日本の工芸品や美術品の蒐集家でもあります。日本の山形にある水族館の経営者が協力していることもあり、パリ水族館には日本から取り寄せたクラゲや錦鯉などもいて、パリの隠れた日本スポットになっています。

大小島さんは海洋環境調査スクーター「タラ号」に1カ月間半乗船して日本海域を巡りました。「タラ号」は2003年にアニエスベー社のエティエンヌ・ブルゴワ社長により購入されて海洋環境調査に用いられてきました。

その時の経験をもとに、大小島さんは300平方メートルに及ぶサメの大水槽の外壁一面に鯨を何頭か描き、その鯨の目を通して大小島さんが「生命のスープ」と呼ぶ海の大切さを訴えています。

鯨は、穴があいたりして使われずに捨てられる運命にあったなめし皮の上に描かれています。鯨の中には、シャガールを彷彿とさせるような色彩で、サンゴや宇宙、マイクロコスモスが描かれています。それらの作品は大小島さんの人柄通り、天真爛漫で、優しい愛情に満ちた作品に仕上がっています。



上から見た 300 m²の壁に描かれた大きな鯨たち Photo by Serge-Koutchinsky

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

この「生命のスープ」という言葉のきっかけは、彼女がちょうど「タラ号」に乗っている時に会った鯨を見た時に思い浮かんだようです。「身体が波に揺られている鯨、皮が溶けて、脂肪が剥きでた白い鯨。そこに鳥や魚、たくさんの生き物たちがその体を食べて来ていました。そして思ったのです。この食べて食べられるその繰り返しがこれまでの地球を作ってきたのではないかと。この海にはどれだけの生命が溶けてきたのだろう。海って生命のスープみたいな存在だ、と思ったのです。」

そして、「この経験の後から私は今回の展覧会で発表した鯨シリーズを始めることになりました。鯨が海からのメッセンジャー、神さまのような存在に思えたからです。」と大小島さんは鯨シリーズを描き始めたきっかけについて語っています。

7



横から見た 300 m²の壁に描かれた大きな鯨たち Photo by Serge-Koutchinsky

ポウレヴィッツ館長は大小島さんの若い才能に注目し、また絵を通じた海洋生物保護の訴えに共感して大小島さんのパリ初個展を開くことにしたそうです。

なお、東京都東久留米市出身の大小島さんは、2015年に同市の南沢氷川神社の拝殿のために《生きとし生けるものたちへの饗宴》という「命の根源」をテーマとした天井画を制作し、2017年に奉納しています。一年に一度特別公開されるそうです。

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>



水族館の大水槽の奥に映し出された制作中の大小島さんのビデオ

なお、本展はメディアでも大きな注目を集め、以下の通り、各紙、各媒体で報道されました。

- Geo.fr : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima
- La-croix.com : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima
- Rtbf.be : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima
- Actu.orange.fr : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima
- Rtl.be : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima
- Goodplanet.info : reprise de la dépêche AFP sur la fresque de Maki Ohkojima

以上